

今回、2016年12月3日よりアメリカ サンディエゴで開催された 58th ASH Annual Meeting に JALSG Young Investigator ASH Travel Award として選出して頂き参加しました。

もともと血液の分野は、治療の効果が毎日の血液検査所見やリンパ節の触診等により数日～数週間の短期間で目に見えることや、目覚ましい速度で新たな診断・治療法が現れることが魅力に思っていました。現在まだ血液内科医となって日は浅いですが担当患者さんの診療にあたる中で、日々いろんなことで判断に迷うことが多いです。最近では PCNSL やリンパ腫の CNS 再発の際にどの化学療法を行いその後に移植や全脳照射はどうか、Ph 陰性の非若年 ALL 患者に対して同種移植をするかどうかといったことで悩んでいました。このような迷いへの手がかりが ASH の学会で得られるのではないかと期待しつつ、今回参加してまいりました。

様々なテーマがありましたが中でも腫瘍免疫療法のセッションが人気で、開始の数十分前から会場前に人だかりができていました。

Education program は基本的な事柄から最近の見解まで分かりやすくまとめられていました。Lymphoma:Challenges and New Directions というセッションでは、PCNSL や難治性 DLBCL について患者の年齢や初発か再発かに分類しながら、各種臨床試験の成績が比較されていました。MDS のセッション中の "Transplant for Myelodysplastic syndromes:Who, When, and Which Conditioning Regimen" というテーマでは過去 15 年間で 65 歳以上の MDS 患者に対する HCT 件数が大幅に増えていること、高齢で TRM を抑えつつ再発をより少なくするにはどういった前処置を行うべきかは未だ検討が必要であること、ドナーソースの選択法など詳しく示されており、とても役立ちました。

ポスターセッションは広大なスペースで、ビールやコーラ、スナック等が振る舞われ軽食をしながら発表者と会話しつつポスターを見ることができるようになっており、会場は非常に熱気に満ちていました。鎌状赤血球症やサラセミアなど日本では稀な疾患についてのポスターも、国内の学会と比較して多く掲載されているように思いました。日本ではなかなか見かけない疾患についても、多くの症例を経験してきた医師と接することができるチャンスでしたが、英語力が不足し質問や議論しきれなかったことが非常に心残りでした。

今回 ASH に参加するという貴重な経験ができ、日頃の血液内科診療へのモチベーションが高まりました。今後も日々努力していこうと思います。

このような機会を頂きました JALSG 関係者の皆様や、多忙な中で快く学会へ送り出して頂いた長野日赤のスタッフの皆様に感謝申し上げます、報告とさせていただきます。ありがとうございました。